釧路における漁業の変遷

鳥　澤　　雅

キーワード：釧路、水産、漁業、歴史

はじめに

釧路はその沖に世界の三大漁場ともいわれる豊かな海を擁していることから、北海道内に限らず、全国的にも有数の漁業基地となっています。釧路港では一時期130万トンを超える水揚げ量があり、その前後には水揚げ量日本一を通算20年以上も維持していたこともありました。

写真１　釧路港におけるサンマの水揚げ
（2003年８月）

しかし、近年は北洋漁場からの締め出しや沿岸・沖合における水産資源の減少などから、釧路への水揚げは年々減少しています。

釧路はマイワシの一大水揚げ基地であったことはよく知られていますが、その昔、クロマグロの水揚げでにぎわったことは、今では一部の人にしか知られていないようです。大漁旗を掲げて多くの漁船が一斉に船出する北洋さけ・ます漁の華やかな出航・見送り風景は、かつては釧路の春の風物詩でしたが、現在ではすっかり見られなくなってしまいました。漁業基地釧路も時代時代によって漁獲されるものや漁業形態も変化しながら今日に至っているのです。

これからの漁業を考えるうえでは、過去の姿を把握しておくことも重要であると思います。そこで、釧路における漁業の変遷を振り返り、整理してみました。

釧路における漁業の創世記「三業時代」

（明治初期まで）

釧路に最初に人が住み着いたのは、今から１万年以上も前の氷河期後といわていれています。その後、６千～７千年前から海が内陸に進み、今の釧路湿原は海になりましたが、人々は逆に生活範囲が広まり、今もそのころの生活を垣間見ることのできる遺跡が湿原周辺に点在しています。貝塚に残されたものを見ると、そのころから海の幸は人々の貴重な糧となっていたことが分かります。

その後、時を経て、江戸時代には今の釧路周辺

は「クスリ場所」と呼ばれ、松前藩や飛騨の商人たちが「クスリ場所」のアイヌ民族と交易していました。このころ釧路周辺ではコンブやサケなどを漁獲して本州と交易していました。函館周辺からはじまったコンブ漁業は、1786年（天明６年）に釧路でも始まったとされています。

1799年（寛政11年）には江戸幕府は蝦夷地を直接経営することになりました。

1869年（明治２年）、明治政府は北海道開拓史を設け、「蝦夷地」は「北海道」、「クスリ（久寿里）」は「釧路」と改称され「釧路国釧路郡」の名が定まりました。翌1870年（明治３年）には江戸時代に釧路の漁場経営を担当していた越後（今の新潟県）出身の佐野孫右衛門の子孫である４代目佐野孫右衛門・寄与作が、開拓史から漁業の権利を与えられて「漁場持」となり、函館や東北地方から漁民を釧路周辺に入植させました。しかし、不漁つづきで、流出者が相次いだそうです。このころの漁業は、春はニシン、夏にコンブ、秋のサケ漁で「三業時代」と言われました。

漁場の拡大と漁船・漁法の大型化・近代化（明治中期から大正末期まで）

1880年（明治13年）には釧路在住の漁民により、たらはえ縄漁業が初めて行われ、1884年（明治17年）には、底曳網の一種である手繰り網（てぐりあみ）漁業が開始されました。このころ動力船はまだ導入されていませんでした。

1887年（明治20年）には釧路漁業組合が設立され、翌年には釧路埼灯台が設置されるとともに、釧路港が特別輸出港に指定されています。このころ、北海道周辺、特に日本海側ではニシンの豊漁に沸き、1897年（明治30年）には全道のニシン漁獲量は史上最高の97万トンを記録しています。

1899年（明治32年）には越後の漁民が故郷で使われていた川崎船を導入して、手繰り網漁業を始めたことにより、漁場の拡大と漁獲量の増大をもたらしました。なお、川崎船というのは、青森県下北産の杉材で作られた長さ7.5～12m、総トン数３トン程度の漁船です。帆船としても使用され、船足が速いことから、沿岸漁業から１～２日航海の沖合漁業へと操業海域の拡大にも貢献しました。さらに、母船式漁業の母船に積み込んでいく船としても使用されました。

前年に勃発した日露戦争が終結した1905年（明治38年）には、それまでの底建網漁業に代わって、南部（今の青森）の八戸からまき網漁船が釧路沖に進出してきて、ニシンを漁獲し始めました。またこの年、西村周右衛門という人が「かとうざめ（ネズミザメ）釣り」を試み、サメに加えてマグロが漁獲されたことから、マグロ漁の有望性を唱えました。実際、釧路周辺の建網にはマグロの来遊が見られ、翌1906年（明治39年）には、池田栄太郎という人がマグロの流し網を試み、好成績を収めたことから、その後、釧路でまぐろ流し網に着業する漁船が増えました。

このころから、それまで漁獲の主体であったニシン、サケ、コンブの漁獲は次第に減って、代わって底曳網や延縄などによるマダラ、スケトウダラ、カレイ類、タコ類などの底魚類や、マグロやサンマなどの浮き魚類の漁獲が増えていくことになります。

1909年（明治42年）には国による釧路港の修築が決まり、翌1910年（明治43年）には釧路に北海道水産試験場の駐在所が設置されています。

このころから釧路沖には宮古や釜石を基地とするまぐろ流し網漁船が進出してきました。1913年（大正２年）には、釧路港口でまぐろ流し網漁船18隻（60人）が大遭難したことから、その後まぐろ流し網漁船に発動機船の導入が急速に広まっていきました。

一方、1927年（大正６年）には動力巻き揚げ機

の普及によって機船底曳網漁船も急増していきました。1919年（大正８年）にはそれまで手漕ぎの川崎船が行っていた「かけまわし」漁法を機船底曳網漁業向けに改良して大きな成果を上げ、現在の底曳網漁業の基礎を築きました。

1914年（大正３年）に始まった第一次世界大戦が終戦となった1918年（大正７年）には、釧路ではマグロの水揚げに沸き、東京方面へ出荷する冷蔵船が不足したほどとのことです。

1916年（大正５年）にそれまでの駐在所から釧路支場となった水産試験場は、1925年（大正14年）にいったん廃止となりました。

鮪（まぐろ）の釧路か釧路の鮪か

（昭和初期から第二次世界大戦まで）

1926年（昭和元年）には千葉からの出稼ぎ漁業者によって釧路沖でいわしまき網漁業が始まっています。翌1927年（昭和２年）には日本水産㈱が我が国では最初のディーゼルエンジンを搭載したトロール網漁船釧路丸を建造し、漁船の機械化・大型化はますます進んでいくことになります。

釧路では、このころから漁船の動力船化もあってマグロ漁の最盛期を迎え、釧路で操業するまぐろ流し網漁船の数は250隻を超え、1929年（昭和４年）には史上最高の300万貫（約１万１千トン）を記録しています。そのころの釧路港の総水揚げ量がせいぜい５万トンほどでしたから、いかにマグロの占める割合が高かったが分かります。水揚げ金額ではマグロが全体の約４割を超える年もありました。「鮪（まぐろ）の釧路か釧路の鮪か」といわれたのもこのころです。

しかしその後、マグロ漁は昭和10年代前半を最後に衰退して行き、代わってマイワシ漁の水揚げが増加し、1934年（昭和９年）には550万貫（約２万トン）を記録しています。さらに、このマイワシも1941年（昭和16年）以降は捕れなくなり、今度は代わってマダラ・スケトウダラの漁獲が増加して行きました。

第二次世界大戦が始まった1939年（昭和14年）には、マダラとスケトウダラで1,200万貫（約４万５千トン）を記録しています。しかし、このころから底曳網漁船の徴用や燃料、漁業資材の不足から、釧路でも漁業は一時停滞期を迎えることになります。

めざましい戦後の復興

（終戦から昭和30年代前半まで）

1945年（昭和20年）７月14～15日に釧路は米軍機による空襲に合い、大きな被害を受けましたが、第二次世界大戦はこの年の８月に終戦となり、その後は国の食糧増産方針とも相まって、釧路の漁業は再び息を吹きかえすことになります。

1949年（昭和24年）には釧路沖でサバのまき網が1,000万貫（約３万７千トン）を揚げ、釧路の水産界は活況を呈しました。また、この年には釧路市東部漁業協同組合と釧路市漁業協同組合が相次いで設立され、廃止されて久しい水産試験場釧路支場も新たに設置されています。

翌1950年（昭和25年）には釧路機船底曳網漁業協同組合、釧路鮮魚集出荷協同組合（ミツウロコ）も設立され、戦後の釧路における漁業体制の基礎がほぼ整いました。また、全国からさばまき網漁船が釧路を基地として集まり操業し、1949年（昭和24年）～1951年（昭和26年）には、全国からのサンマ、マサバ漁船による水揚げで釧路港はさらに活況を呈することになります。

サンマの漁法は、1930年代以前は流し網であったものが、このころより効率の良い棒受網漁法が開発されたことから、1949年（昭和24年）には、すべてのサンマ漁船が棒受網に転換しました。

一方、それまで沿岸域で操業していた小型さけ・ます流し網漁業は、1950年（昭和25年）に釧路

水産試験場の指導によって試験操業として沖合に漁場を求めたところ、大漁となったことから、漁場を沖合に広げた小型さけ・ます流し網漁業も1951年（昭和26年）には、好漁となりました。また、この年には釧路副港の造成が開始されています。

1952年（昭和27年）にはそれまで中断していた北洋さけ・ます漁業が再開し、釧路港は1954年（昭和29年）には、北洋さけ・ます独航船の、1955年（昭和30年）には極洋捕鯨の北洋さけ・ます船団の基地に、それぞれ指定されています。

一方、沖合底曳網漁船は1953年（昭和28年）に択捉島沖の漁場で試験操業を行って成果を収め、以降択捉島沖の漁場が沖合底曳網漁場として重要な位置を占めることになります。

このころ、大戦中の戦時特例により認められた小型底曳網漁業が、終戦後の1950年（昭和25年）に政府により全廃されたことにより、正規の漁業に組み込まれることのできなかった零細漁民が、密漁小手繰り網漁業で生計を立てざるを得なくなったことから、社会的にも種々の問題や事件が発生しました。

この問題を解決するために、地元の行政、研究、漁民が連日のごとく協議し、結果として1957年（昭和32年）に30隻以内の範囲でえび桁曳網漁業が釧路水試の委託試験として特別採捕許可で操業できるようになりました。こうして密漁小手繰り問題は解決されました。これによって、水深30m以浅がししゃも桁曳網漁業、水深200m以深はえび桁曳網漁業、その中間はその他の漁業と、漁場の一応の整理もなされました。

冷凍すり身技術の開発と北転船の誕生
（昭和30年代後半から昭和40年代まで）

釧路副港魚揚場が完成した1960年（昭和35年）、道立水試はスケトウダラの冷凍すり身技術を開発しました。この冷凍すり身技術は、その後のスケトウダラ漁業と水産加工業の発展に大きく寄与しました。

また、我が国周辺における漁場の狭隘化から、北洋海域への底曳網漁業転換要項がこの年告示され、以降、北転船と呼ばれる北洋転換漁船による、北洋における操業が本格化していくことになります。

これらのことから、釧路へのスケトウダラの水揚げ量は急激に増加し、マサバの豊漁とも重なって（図１）、1969年（昭和44年）には釧路港が水揚げ量全国一となり、その後、1977年（昭和52年）までの９年間、その座を維持し続けました。

その一方で、1971年（昭和46年）にはさけ・ますはえ縄漁業が禁止され、1972年（昭和47年）には中型さけ・ますはえ縄漁業が全廃されました。

このころから、自国周辺資源の囲い込みに向けた動きが急となり、それに反対する他国周辺資源に頼る最大の遠洋漁業国であった日本への批判が高まり、日本の主張する領海３海里は世界の中で少数派となっていきます。

200海里時代への突入とマイワシの大豊漁
（昭和50年代～昭和60年代）

そうした中、アメリカ合衆国は当時論議を重ねていた第３次国連海洋法会議の結論が出る前に、1977年（昭和52年）から200海里漁業専管水域を設定しました。当時、日本同様遠洋漁業への依存度が高かったソ連（現ロシア連邦）も、日本の期待に反してアメリカを追うように同年末に200海里漁業専管水域を設定してしまいました。その他の各国も世界の二大大国の決定に続いて、200海里漁業専管水域を次々と設定していきました。

こうした流れに抗しきれない日本も1977年（昭和52年）に、領海12海里（領海法）、200海里漁業専管水域（漁業水域に関する暫定措置法）を制定しました。このような世界情勢を敏感に感じた国

内では、魚隠しなどもあって魚価が高騰し、1977年（昭和52年）には、釧路管内でも過去最高の水揚げ金額を記録することになりました（図２）。

このころから、それまで釧路における水揚げの多くを占めていたサバ類の漁獲が減少し、1976年（昭和51年）には代わってマイワシの漁獲が多くなっていきました。

200海里制の影響でスケトウダラの水揚げが急激に減った影響で、釧路港は1978年（昭和53年）には、水揚げ量日本一の座を一時八戸港に明け渡しましたが、マイワシの水揚げ量は年を追うごとに増加し、1979年（昭和54年）から1991年（平成

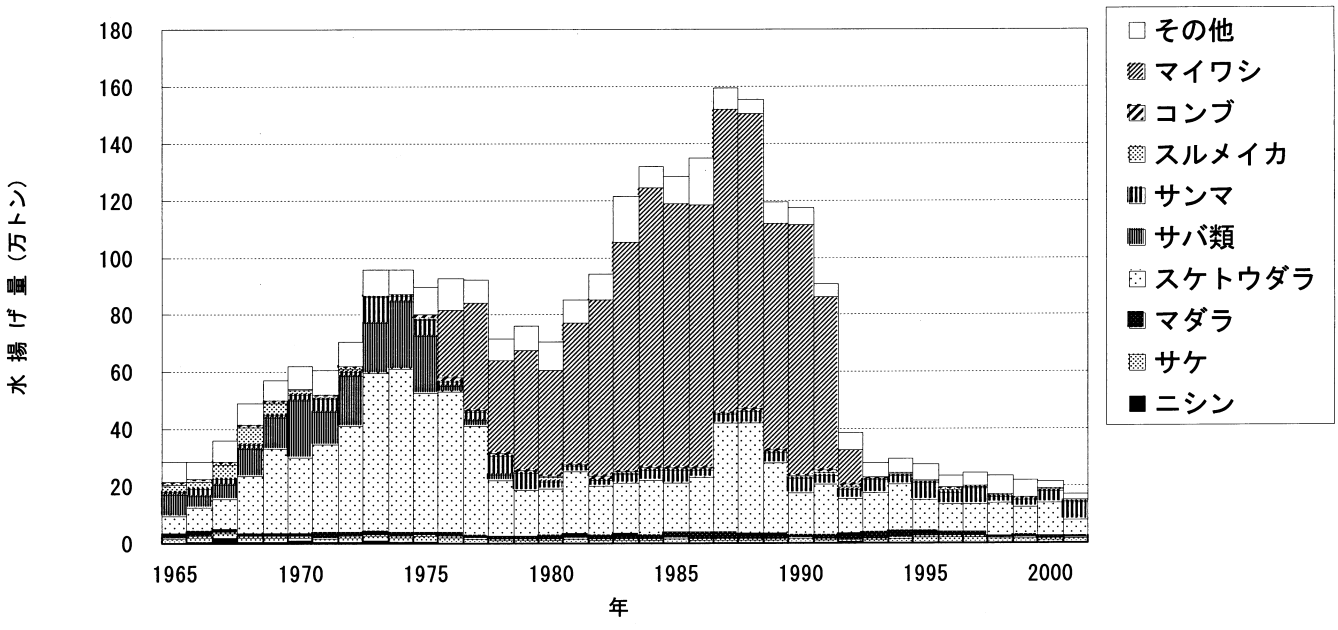

図１　釧路支庁管内魚種別水揚げ量の変遷（資料：北海道水産現勢）

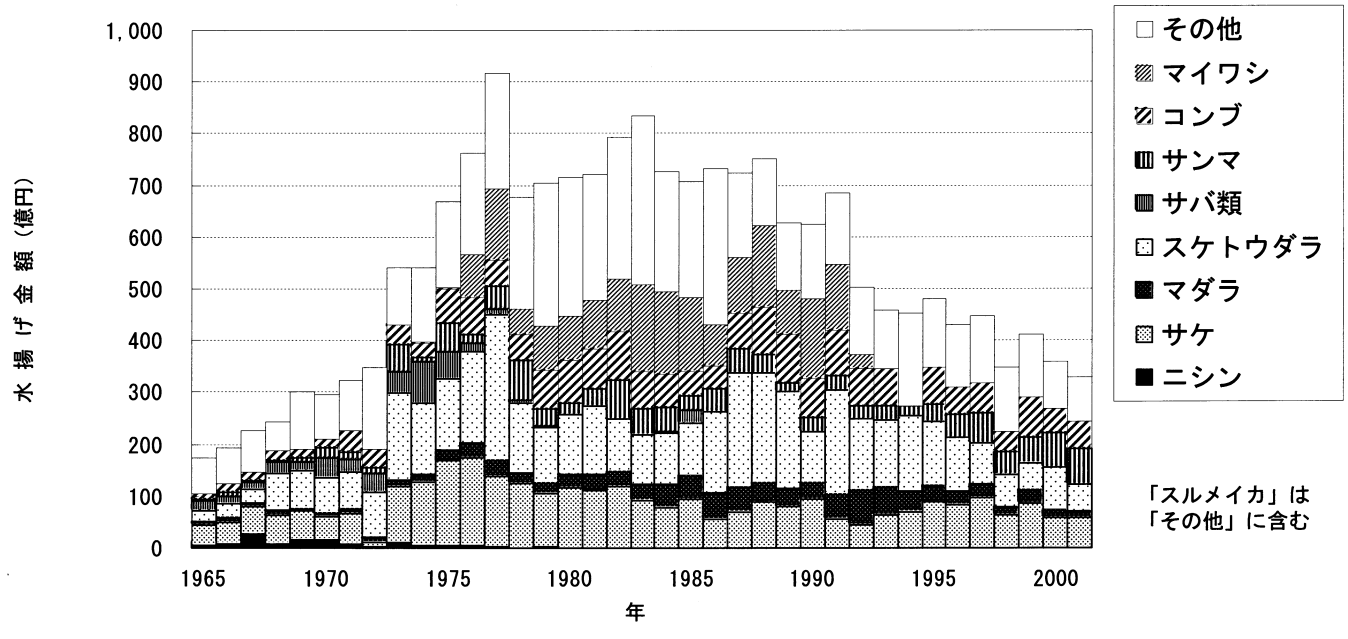

図２　釧路支庁管内魚種別水揚げ金額の変遷（資料：北海道水産現勢）

３年）までの13年間、水揚げ量日本一の座を維持し続けました。

釧路港では、水揚げ量が1983年（昭和58年）には100万トンを突破し、1987年（昭和62年）には133万トンを記録しました。

遠洋漁業からの締め出しとマイワシ漁業の終焉（平成以降）

しかし、その後は遠洋漁業のさらなる締め出しによるさけ・ます漁船や北転船の相次ぐ減船に加え、1992年（平成４年）を最後に、公海流し網が全面禁止になりました。1993年（平成５年）には日米加ロの４か国による「北太平洋における溯河性魚類の系群の保存のための条約」が発効し、我が国の北洋さけ・ます漁業の操業水域は条約発効以降、我が国200海里水域内及びロシア200海里水域内に限定されることになりました。

その後マイワシ資源は急激に減少し、1994年（平成６年）を最後に、ついにまったくとれなくなりました。しかし、1998年（平成10年）には道東沖にカタクチイワシの群が現れ、久しぶりにまき網船団がやってきて水揚げしました。2002年（平成14年）の釧路港における水揚げ量は14.9万トンで全国第６位となっています。

終わりに

こうして見てくると、釧路における漁業は、時代により漁獲する魚種や漁業形態を変えながら営まれてきたことが、よく分かります。また、釧路の漁業は、まぐろ流し網漁船、北洋さけ・ます漁船、さば・いわし巻き網漁船などの、いわゆる外来船によって大きく支えられてきたことも分かります。

1980年代後半から、急激に水揚げ量が落ち込んできましたが、これはこうした北転船などの遠洋漁業や外来船による漁獲が減少したことがもっとも大きく影響しています。一方で、水揚げ金額の減少度合いは水揚げ量ほどではありません。

これからの時代は、価格も含め、前浜資源をいかに上手に利用していけるかが、これまで以上に問われることになるでしょう。

【主な参考文献】

青木　久・熊澤弘雄：二百海里の波紋と北洋漁業．全国鮭鱒流網漁業組合．東京．390頁（1983）

安福数夫：二百海里概史．全国鮭鱒流網漁業組合．東京．896頁（1983）

釧路市：市制施行70周年記念　目で見る釧路の歴史．釧路市．釧路．159頁（1992）

釧路市史編さん事務局編：釧路昔むかし－江戸時代の釧路－．釧路新書17．釧路市．釧路．211頁(1991)

「釧路の魚」研究会：釧路の魚．釧路新書21．釧路市．釧路．267頁(1993)

桜井基博ほか：釧路のさかなと漁業．釧路叢書26．釧路市．釧路．396頁（1988）　寺島敏治：釧路の産業史．釧路叢書26．釧路市．釧路．396頁（1988）

水島敏博・鳥澤　雅編：漁業生物図鑑　新北のさかなたち．北海道新聞社．札幌．645頁（2003）

布施　正：釧路水産史.釧路市.釧路.207頁(1973)

布施　正：漁業基地・釧路．釧路新書３．釧路市．釧路．215頁（1978）

布施　正：釧路漁業発達史．釧路叢書４．釧路市．釧路．404頁（1962）

（とりさわ　まさる　　釧路水試資源管理部
報文番号　B2230）